

# 〈コラム〉エイムズ唯子の「心理学の周辺」

## 第3回：ヘンシン願望の巻

私は子どものころ、女優になりたいと思ったことがあります。役を演じ分ける、ということがとても魅力的に思えたのです。大人になって教師となったとき、教室を舞台だと思ふことにしました。台本を書き、リハーサルやイメージトレーニングで集中力を高め、チャイムとともに颯爽と教室に現れてたちまち学生たちをくぎづけにする！なんてうまくいくことはめったにないにしても、授業に対するそんな気持ちの高め方は、やがて生活の一部とも、ひそかな愉しみともなっていました。少なくともこの秋までは。



夏の京都・竜安寺にて

この秋最大の事件は、「講義をしているときの先生が、ロボットのように見えます」というある学生からの感想レポートでした。びっくりしたなんてもんじゃありません。前年に悔いを残したこの授業（「教育相談」）には、今年は相当思い入れて準備をし、いささかの手ごたえすら感じていたのです。けれども、冷静になって考え、その学生とも話をするうちに、もしかするとそれは案外まともな感覚なのかもしれないと思いはじめました。問題のその日の講義は「無意識を意識化する方法」についてでした。無意識とは、意識しようにもできないからこそ「無」意識であるはずですが。そんな得体のしれないモノに名前をつけて、夢やら言い間違いやら神話なんかから他人の無意識を読み解いてしまった精神分析の父たるフロイトはオソロシクエライ人なのですが、無意識の読み取り方についてペラペラと説明してみせた教師の私も、その学生にしてみればなんともオソロシクであったということらしいのです。そのペラペラの内実は、あちこちの教科書やらウィキペディアやら、使えるものを総動員してつなぎあわせた苦肉の台本だったというのに。

ところが「エイムズ先生がわからない！」と訴える学生が、ひとりではないことがわかったとき、私は本格的に困惑しはじめました。別の学生は、私が研究室で見せる友達のような顔と、教室での先生然とした顔の違いがうまく受け入れられず、時にはひどく混乱するというのです。学生たちの多くは、私のいくつかの顔やそのギャップに気づいても、そういうものなのだろうとスルーして行きます。しかし感受性の強い一部の学生にとって、その違和感は素通りできないばかりか、つまづきの原因にもなりかねないとしたら、教壇女優は廃業必至…？

他愛ない子どものころの憧れが、変身願望として今日までしぶとく私のなかに生き残っていたということだけなら、教室ではなく別の場所に変身することを考えるべきなのかもしれません。とはいえ、授業が少々演出過剰になったのは、私の変身願望のせいばかりとも言い切れないところがあります。終わると時計の針が夜8時近くを指す教職課程の必修授業で、どうしたって重くなるまぶたと格闘する学生たちのけなげさに対する、それは私なり的一种のオマージュでもありました。さらに言えば、わかりやすく飽きさせない講義や、ノートをとりやすい整った板書など、自分が大学生だったころには考えられなかったようなことが大学教員にも例外なく求められる、大学全入時代という現実はどう対応するかという問題があり、話しやすく親しみやすい大学の先生像も期待されています。

教室ではやたらにテンションをあげないと腹をくくって、どこかよそで化けるか、それとも教壇女優を続けるのなら、ペラペラのうすっぺーらではなく、とことんリアリティのある芝居をする覚悟をきめるか。ハムレットもびっくりのこんな贅沢な悩みを抱えて新年を迎えられる幸せに感謝しつつ、今回のところはとりあえず、ハッピーニューイヤー！皆さまの今年のプチ変身プランいや違った、新年の計はいかに？

（高崎健康福祉大学講師、フォーラム協同研究者）